

おおてみち

第112号

令和2年(2020年)7月1日
滋賀県立安土城考古博物館



安土城跡徳見寺三重塔



安土城跡出土金箔瓦(滋賀県蔵)



西教寺総門(びわこビジターズビューロー提供)

第62回企画展

お城の リユース

信長・光秀・秀吉・家康



大溝城跡出土瓦(高島市教育委員会蔵)



八幡山城



近江風土記の丘
滋賀県立 安土城考古博物館
Shiga Prefectural Azuchi Castle Archaeological Museum

お城のリユース

— 信長・光秀・秀吉・家康 —

会 期 7月18日(土) ～ 9月13日(日)
会 場 企画展示室

戦国時代の近江には、守護である六角氏をはじめとして、織田信長、明智光秀・豊臣秀吉、徳川家康も城を築きました。なかでも信長の安土城は、以後の城のモデルとなりますが、すべてがオリジナルではなく、既存の城ばかりか寺社もリユースしていました。

城におけるリユースは、信長だけでなく秀吉や家康も行っています。そして、彼らが築いた城が廃城になると、リユースされました。

本展では、天下人たちが築いた城を、リユースの視点でたどりながら、城の発掘調査で出土した資料、城の遺構や今も残るリユースされた城の建物を写真・パネルで紹介します。

展示概要

序 章 お城のリユースとは

第1章 信長以前の城

観音寺城、小谷城、清水山城

第2章 信長時代のリユース

宇佐山城、坂本城、安土城、大溝城

第3章 秀吉時代のリユース

長浜城、八幡山城、水口岡山城、大津城、

佐和山城

第4章 家康時代のリユース

膳所城、彦根城

終 章 明治時代のリユース

今も残る城の建物

《主な展示資料》

小谷城跡出土資料

清水山城跡出土資料

坂本遺跡出土資料

坂本城跡出土資料

安土城跡出土資料

大溝城跡出土資料

長浜城跡出土資料

八幡山城跡出土資料

水口岡山城跡出土資料

大津城跡出土資料

佐和山城跡出土資料

膳所城跡出土資料

彦根城跡出土資料

若宮八幡神社資料

● 開館時間：午前9時～午後5時

● 休館日：8月31日(月)、9月7日(月)

● 入館料：大人600円(480円)

高大生360円(290円)

*今後の新型コロナウイルス感染症の状況によっては、中止または変更する可能性があります。随時、当館ウェブサイトにてお知らせいたしますので、ご来館の際は最新情報をご確認ください。

皆さまにはご不便、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



膳所城の城門をリユースした若宮八幡神社表門
(大津市歴史博物館『戦国の大津』より転載)



大溝城からリユースされた水口岡山城の瓦
(甲賀市教育委員会蔵)



新調された水口岡山城の瓦
(甲賀市教育委員会蔵)

近江八幡市後川遺跡出土の土偶

後川遺跡は近江八幡市長田町と杉森町に所在する、縄文時代から江戸時代にかけての遺跡です。

今回紹介する縄文時代の土偶は、平成二年（一九九〇年）から平成五年（一九九三年）にかけて、蛇砂川の河川改良工事に伴う発掘調査で出土したものです。この調査では、上層から鎌倉時代の建物跡などが、下層から縄文時代後期（紀元前一五〇〇年頃）の住居跡などが見つかっています。

この縄文時代後期の遺構などから土偶の破片が六点見つかりました（写真）。1は楕円形をしている土偶です。長径五、



写真 近江八幡市後川遺跡出土の縄文時代後期の土偶

五七cm、短径四、七五cm、厚さ一、八cmで、前面は丸く膨らみ、背面は逆に凹んでいます。全面に三mm程度の線で文様が施されています。前面、背面ともに縦に二本、横に三本の線が中央で直交するように施されています。側面は、三本の線が側縁に沿って施されています。

2は土偶の胴体部分の破片です。高さ四、一cm、幅四、九cm、厚さ三、〇cm、右肩の付け根部分から右脇腹にかけて幅三mm程度の一本の線が施されています。3は長さ三、六cm、幅二、七cm、厚さ一、七cmで、形状から、左右どちらかの肩から腕の破片です。4は長さ四、七cm、幅三、三cmの円柱状の破片で、膝から下の部分の破片です。足首部分には、幅二mmの線が施されています。6は高さ一、七cm、長さ三、七cm、幅二、七cmの足の破片です。ちょうど靴のような形をしており、中央に径二mmの孔があります。土偶を組み立てる際に、心棒のようなものを差し込んだ痕跡かも知れません。

このうち3と5は、全く違う場所から出土しています。しかし色や作られた粘土とそこに混ぜ込まれた砂粒が

非常によく似ています。このことから同じ土偶の破片の可能性ががあります。

では、同じ土偶と仮定して、どのような土偶が考えられるのでしょうか。時期は縄文時代後期、手足の表現があるということから絞り込んでいくと、東海地方を中心分布する、「今朝平タイプ土偶」と呼ばれる土偶が最も近いと考えます（図1）。この今朝平タイプ土偶の特徴は、頭部はあるものの、顔面表現を持たない、体全体はふくよかな表現で、腹部は妊婦のように大きく膨らむ、背面は中央が凹むものや反るものも多く、腰部や臀部は腹部同様に膨らみ、手足は関節部分がしっかりとくびれ、そのためふくよかなイメージ

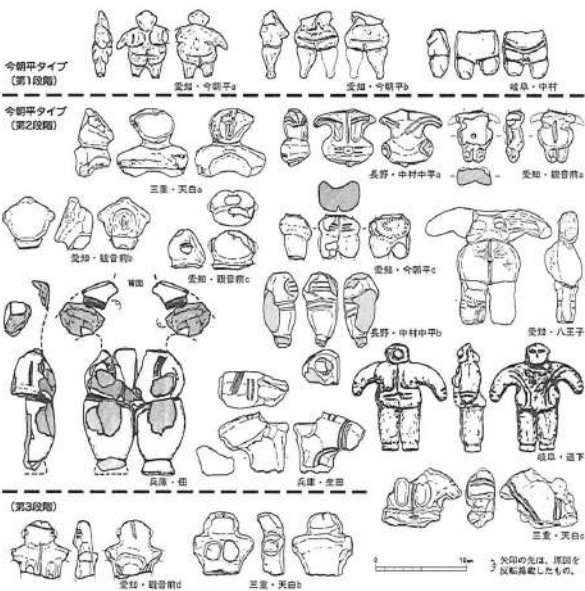


図1 今朝平タイプ土偶（豊田市教育委員会編2019）

ジをさらに強調しています。3と5は丸みを帯び、厚みのある破片です。5は足首がしっかりとくびれています。以上から後川遺跡出土の土偶片3点は今朝平タイプ土偶の可能性が高いと考えます（図2）。



図2 後川遺跡出土の土偶の復元図

縄文時代後期の滋賀県は、東西のヒトやモノの交流が活発だった時代と考えられています。今回紹介した後川遺跡出土土偶もそれを物語る資料なのです。

【引用・参考文献】

- 豊田市教育委員会編 2019『今朝平遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第79集
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1996『後川遺跡（事業名 高木遺跡）』長命寺川（蛇砂川）中小河川改修工事関連埋蔵文化財調査報告6

学芸員の「お仕事」——文化財の保存管理——

これは、今年（令和二年）五月のとある晴れた日、博物館裏の一角で見られた光景です。同じ頃テレビ画面では、似たような格好で新型コロナウイルスのPCR検査に奔走する医療従事者の皆さんの姿が頻繁に映し出されていましたが、博物館で同検査をおこなっていたわけではありません。

作業をする人の手元にあるのは、大般若波羅蜜多經というお経で、今から五〜六百年くらい前室町時代頃のもので、近江八幡市内のお寺の所蔵品ですが、カビが発生していたため、博物館でお待ちするにあたって、まずは殺虫・殺菌に効果のある薬剤で、燻蒸を行いました。これでカビ菌は死滅するわけですが、死体―すなわち胞子や菌糸はそのまま付着しています。これをきんと除去してから収蔵庫に入れないと、これらが新しい

カビの餌となり、再びカビが発生する可能性があります。無菌室でもない限り、私たちが生活する空气中に菌は普通に存在しますから、油断はできません。そのため、お経に残ったカビの遺骸を徹底的に取り除いておく必要があるのです。

ところがこの「カビ払い」、けっこう厄介な仕事です。私たちは普段あまり気にしていませんが、カビ菌の中には、体内に入ると重大な病気を引き起こすものも含まれています。死んでもまだ、危険性をもつカビ菌もあるそうです。そのため万が一に備え、カビ払い作業をするときは、防護服・防護帽を着用し、ビニール製の手袋をし、最近有名になった「N95マスク」を着用しなければなりません。まさに、新型コロナウイルス対応と同レベルの警戒が必要なのです。室内で作業をする、高性能フィルターを備えた空気清浄機が必要になるため、写真のように野外で行います。

雨の降った日はもちろんですが、湿度が高いときは、お経が水分を吸ってしまうため、やはり作業ができません。そのため、作業ができるのは、一年のうちでカラッと気候のよい五月（梅雨までの間）か、一〇・十一月に限られてしまいます。

大般若波羅蜜多經は全部で六百巻。一巻の長さ数メートルにおよび、表裏両方扱わなくてはなりませんから、一人が一時間に払えるのは、どん



なに頑張っても二〜三巻が限度です。単純計算しても、五十日以上かかってしまいます。作業できる日は前述のように限られますから、数年かかることとなります。

新型コロナウイルス感染防止のため、博物館も休館していましたが、開いていなくても学芸員の仕事はたくさんあります。展覧会や常設展示、講演やイベントなどの普及事業など、開館しないといけない仕事以上に、収蔵品を保存管理するための仕事がたくさんあることは、あまり知られていません。今ご紹介したカビ払いなども、地道ではありますが、大切な文化財を後の世に伝えるために、なくてはならない仕事なのです。（高木叙子）

